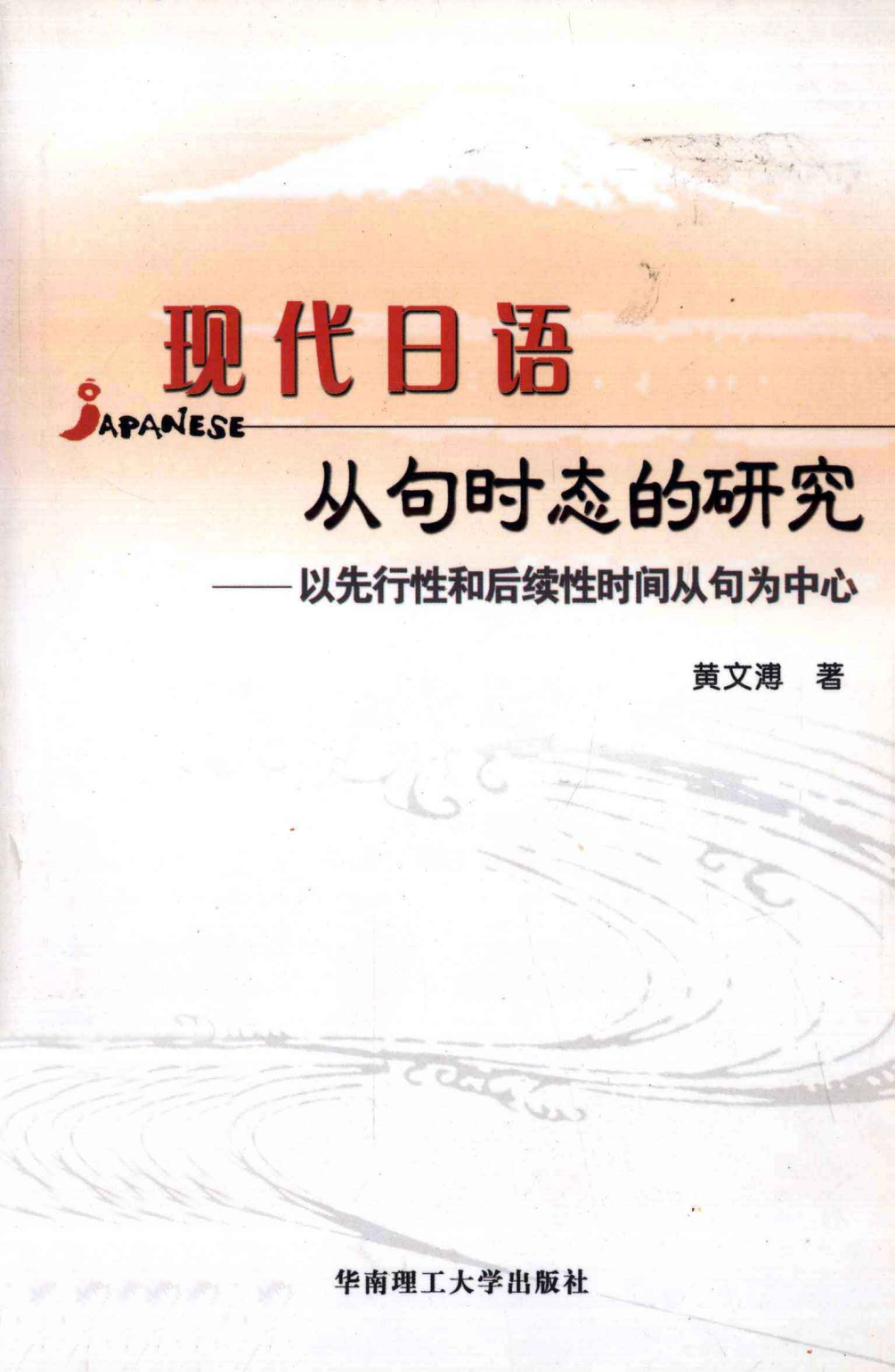




现代日语

 JAPANESE

从句时态的研究

——以先行性和后续性时间从句为中心

黄文溥 著

华南理工大学出版社

内 容 简 介

本书从多个语料库中收集了大量典型例证,就研究相对比较薄弱的从句时态进行深入考察,利用动态理论考证了现代日语从句时态的变化过程,揭示了从句时态的本质特征,明确了从句时态与主句时态之间的关系,对迄今研究中的不足乃至失误作了有效补正。

本书适用于广大日语爱好者、研究人员、高校师生学习研究。

图书在版编目(CIP)数据

现代日语从句时态的研究:以先行性和后续性时间从句为中心/黄文溥著. —广州:华南理工大学出版社, 2010. 11
ISBN 978-7-5623-3363-0

I. ①现… II. ①黄… III. ①日语—从句—研究 IV. ①H364.3

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2010) 第 197665 号

总发行: 华南理工大学出版社

(广州五山华南理工大学 17 号楼, 邮编 510640)

营销部电话: 020-87113487 87111048 (传真)

E-mail: scutc13@scut.edu.cn

<http://www.scutpress.com.cn>

责任编辑: 徐明媛

印刷者: 广州市穗彩彩印厂

开 本: 850 mm × 1168 mm 1/32 印张: 12 字数: 301 千

版 次: 2010 年 11 月第 1 版 2010 年 11 月第 1 次印刷

印 数: 1 ~ 500 册

定 价: 25.00 元

版权所有 盗版必究

序

日语时态研究早于二十世纪初就已出现，至二十世纪中叶，成为日语语言学界最热门的研究课题之一。相关研究甚多，既有见解独到的论文，更有自成体系的专著。然而，由于时代的局限和科技水平的制约，时态研究与其他语法研究一样，主要借助手工收集例证或内省法进行，无论考察范围、例证数量抑或覆盖面均有所限，考察难免不周。

利用电子计算机技术的语料库的出现，为语言研究提供了有利条件，文溥同志的研究得益于此。他从多个语料库中收集了覆盖各类文本的大量典型例证，就研究相对比较薄弱的从句时态进行深入考察，利用动态理论和认知语言学理论考证了现代日语从句时态的变化过程，揭示了从句时态的本质特征，明确了从句时态与主句时态之间的关系，对迄今研究中存在的不足乃至失误作了有效补正。

文溥同志自攻读硕士课程时起就致力于日语时和体的研究，三年前考入广东外语外贸大学现代日语方向博士课程后，更专注于日语从句时态研究，这无疑是研究日语时态的绝佳切入点。在多年积累的基础上，又经三年寒窗苦读、潜心钻研，完成了这一对日语研究和教学具有重要参考价值的拓展性研究。

文溥同志嘱我作序，有感于他多年研究日语时态的不倦精神和严谨的科学态度，欣然命笔，是为序。

广东外语外贸大学教授

博士生导师 杨诒人

2010年7月于广州白云山麓外国语大学寓所

目 次

第1部 理論と方法、研究史と基本的な概念	1
序章 理論的背景と研究の方法	3
第1章 現代日本語の相対的なテンスに関する研究 ...	25
第2部 後続性/先行性を表わす時間節における相対的な テンスの通時的な確立	90
第2章 後続性を表わす時間節における相対的なテン スの通時的な確立	93
第3章 先行性を表わす時間節における相対的なテン スの通時的な確立	124
第4章 接触的な先行性を表わす時間節における相対 的なテンスの通時的な確立	164
第3部 時間節のテンス形式の使用と構造・体系との絡み 合い	213
第5章 時間節のテンス形式の使用と構造との絡み合 い—「述語+マエ+ノ+名詞」のテンス形式 の使用をめぐる—	215
第6章 時間節のテンス形式の使用と構造と体系との	

絡み合い(その1)―「直前(ニ)」節のテンス 形式の使用をめぐる一……………	237
第7章 時間節のテンス形式の使用と構造と体系との 絡み合い(その2)―「述語 + 時間量の表現 + マエ」のテンス形式の使用をめぐる一 ……	251
第4部 時間的先行性、その他の意味的な要素 ……	285
第8章 時間的先行性と原因性―「結果」節のテンス 形式―……………	287
第9章 時間的先行性と空間性―「ソバカラ」節のテ ンス形式―……………	318
第5部 まとめと今後の課題……………	347
終章……………	349
参考文献……………	359
后記……………	377

第 1 部 理論と方法、研究史と 基本的な概念

序章 理論的背景と研究の方法

0.1 はじめに

言語は生きていれば変化するという事実は経験から分かることであり、言語を真剣に考えている人なら誰でも否定しないことであろう。しかし、言語体系に関しては、変化と関係があるか否かで、鋭く対立する二つの見方が存在する。

ソシュールは『一般言語学講義』で次のように語っている。

それらの通時論的事実は、体系をかえようとするものでさえない。ひとは一の関係体系から他のそれへと移ろうと欲したのではない；変更は配備の上におこなわれるのではなく、配備された要素の上におこなわれるのである。

ここにおいて、われわれはすでに述べた原理をふたたび見出す：体系はけっしてちよくせつ変更されるものではない；それじたいでは不易である；ただある要素のみが、それらを全体に結びつける連帯性にとんちやくせず変遷したのである。（小林訳 1972：119）（下線、筆者）

ソシュールは、また「…静態的部面にかかわるものはすべて共時態的であり、進化と関係のあるものはすべて通時態的である」（小林訳 1972：115）と言っている。しかし、ソシュールのこのような考え方から「言語は絶え間なく変化するが、変化しないことによって始めて機能する^①」（Coseriu 1973：1）といったようなパラドックスが生じてしまうのである。更に、こ

① これはCoseriu（1973）がBally（1932）から引用する言葉である。（Bally, Charles *Linguistique générale et linguistique française*. Berne: A. Franke, 1932.）

のような考え方を貫いていくと、言語変化に対する解釈が基本的に変化の対立面、即ち共時的な記述の中に根ざされているというパラドックスに直面しなければならないのである。複数の共時態を比較し、変化を捉えようとすることによって得た非連続的な変化の結果は、連続的な変化という我々の一般的な理解と著しく食い違うことになってしまうのである（Hopper & Martin 1987）。言語に対するソシュールの捉え方が様々な問題点を抱えているために、それを真っ向から否定する見方が打ち出されている。以下がその代表的なものである。

体系の形成を理解するには（特定時点における特定体系を記述するためでないかぎり）変化から出発しなければならない。…（中略）…したがって、言語はあらゆる瞬間において体系であるとすれば、また、あらゆる瞬間、それは「変化し終っているところで出会う」ものであるとすれば、これは言語は体系として変化しているということ、つまり、言語は体系的に生成することを意味するのである。…（中略）…けだし、「言語を言語たらしめているもの」はたんにその構造ではなく（構造は、言語が機能してゆくためのたんなる条件にすぎない）、言語を創造し言語を伝統として維持するゆえんのその言語的活動である。そこで、もし変化が言語の体系的生成として理解されるならば、「体系」と「変化」との間にはいかなる扞格もない。いな、「体系」ならびに「運動」といった対立しあうものを考えるべきではないのであって、考えるべきは「運動における体系」のみである。言語の発達とは、肆意的で危っかしい絶えざる「変化」ではなく、絶えざる体系化である。そして、「言語の状態」一つひとつは、まさにこれが体系化の瞬間であるから、体系的な構造を示しているのである。（Coseriu 1973）（田中・かめい訳 1981：222～223）（下線、筆者）

このように、言語の変化が単に「あらゆる変化の萌芽が見出されるのは言のなかである」（小林訳 1972: 136）というソシュールの言明に示されるようなコミュニケーションにおける言語の使用に見られる変化にとどまらず、言語体系自体もそれに伴って変化すると考えられるのである。

本研究は、言語体系はいかに言語使用において生じてくるのかというような動態的な側面に注目する。具体的には、日本語の従属節のテンス形式を考察の対象に、実証的な方法に基づき、文法体系の動態的な研究に取り組んでいきたいと考える次第である。

0.2 言語の動態的研究

ソシュールは、言語体系はそれ自体は変化しないという見方を持っているほかに、ラングとパロールの関係に関して、次のような考えを述べている。

言語は、言とはことなり、切りはなして研究しうる対象である。われわれはもはや死語を話さないが、けっこうその言語組織をものにすることができる。言語の科学は、言語活動の他の要素がなくてはませるばかりか、そうした他の要素が混入していないときでなければ可能でない。（小林訳 1972: 27～28）

このような考えは、生成文法の言語体系の自律性という考えへと繋がっていく。しかし、ラングが言語使用としてのパロールから独立しているという観念、或いはソシュールが人為的に掘り下げた静的な共時態と動的な通時態の溝に違和感を感じている言語学者がいろいろな言語の動態モデルを考案した。以下ではそのうちのいくつかのモデルを見られたい。

(1) 創出される文法 (Emergent Grammar)

ディスコースと文法との関連に興味を持っている多くの研究者は、言語的事実を詳細に観察するうちに、文法が言語使用と切り離れたところでは生まれてこないという信念を固めてきている。Hopper (1987、1988、1998) は、A Priori Grammar Perspective (先験的文法のパースペクティブ) と Emergent Grammar Perspective (創出される文法のパースペクティブ) を区別し、前者は文法をディスコースの基礎と見なすのに対して、後者は文法がディスコースに従属し、そこから創出されると見なすといっている。Hopper (1988) は、創出される文法を次のように説明している。

The Emergence of Grammar (EOG) attitude, has come to view grammar as the name of for a vaguely defined set of sedimented (i. e., grammaticized) recurrent partials whose status is constantly being renegotiated in speech and which cannot be distinguished *in principle* from strategies for building discourses. (Hopper1988: 118)

創出される文法の枠内に入っていると言えるような研究は、談話の中に繰り返し現れるパターンとその慣習化を重視し、談話の中から創出されつづける文法構造を探求する。例えば、Hopper & Thompson (1984) では、名詞と動詞が持っている通言語的な形態・構文的な特徴は、それぞれ参加者の同定と事象の報告といったディスコースの機能に帰することができると主張している。また、Hopper & Thompson (2001) では、会話の中に繰り返し現れる発話の言語的構造を考察し、そのような構造が通常仮定された言語的な構造とは異なり、動詞タイプの使用頻度が高いほど、その項の数が予測しにくくなるということ

を明らかにした。

しかし、Helasvuo (2001) が指摘したように、創出される文法は、文法と言語の存在論に関する詳細な見方を打ち出してはいるが、言語分析の具体的な枠組みを提供するわけではないのである。

(2) 動的使用依拠モデル (A Dynamic Usage-Based Model)

言語使用が話し手の持っている言語知識に強く影響を及ぼしているということを唱え、文法的な知識の心的表示の動的なモデルを作りあげようとする認知的な理論としてはLangacker の動的使用依拠モデルが挙げられる。Langacker (1987) は動的使用依拠モデルの特徴を次のように述べている。

Substantial importance is given to the actual use of the linguistic system and a speaker's knowledge of this use; the grammar is held responsible for a speaker's knowledge of the full range of linguistic conventions, regardless of whether these conventions can be subsumed under more general statements. A nonreductive approach to linguistic structure that employs fully articulated schematic networks and emphasizes the importance of low-level schemas. (Langacker1987: 494)

Langacker (2000) によると、話し手の言語知識を構成する膨大な構造体は、定着 (entrenchment)、抽象化、拡張、合成、連合といった基本的認知現象が多様な領域における様々なレベルの組織化で繰り返されることによって出来上がっているという。動的使用依拠モデルは、言語的な定着度や慣用度が繰り返しの度合いに比例するととらえ、数多くの事例からスキーマが抽出されるプロセスに注目し、そのスキーマから新しく出あった事例を認識したり、拡張のプロセスによって新しい事例をカ

テゴリー化していくというものである。例えば、[[MOUSE] (意味極) / [mouse] (音韻極)] という記号的な単位は、経験の繰り返しによって、言語使用者の慣習的な言語知識の一部になる。言語使用者は、たくさんの事例からMOUSEというスキーマを抽出し、このスキーマから新しく出会ったネズミを認識することができる。そして、このスキーマを使って、ネズミといろいろと違うところがありながら形が似ているコンピューター用のマウスをカテゴリー化していく。Langacker (2000) によると、このモデルは意味論、音韻論、辞書、形態論、統語論など、言語のすべての領域に適用されているのだという。

(3) 蓋然性文法 (Stochastic Grammar)

言語使用者の経験が心的な表示に影響を与えるため、その言語に蓋然的な情報が組み込まれているというのが蓋然性文法の主張である (Clark 2005)。このような蓋然的な情報は、言語的表示のすべてのレベルにわたって見られるという。

A wide variety of evidence suggests that language is probabilistic. In language comprehension and production, probabilities play a role in access, disambiguation, and generation. In learning, probability plays a role in segmentation and generalization. In phonology and morphology, probabilities play a role in acceptability judgments and alternations. And in syntax and semantics, probabilities play a role in the gradience of categories, syntactic well-formedness judgments, and interpretation. Moreover, probabilities play a key role in modeling language change and language variation. (Bob *et al.* 2003: vii)

例えば、文法性判断のよりどころとされる内省は常に言語的経験に基づく。ある発話や単語はよく耳にする別の発話や単語に似ていれば、適格と判断されがちであるし、逆にそれまで聞

いた発話や単語と何も類似したところがあれば不適格と判断されがちである。このように、メンタルな文法は言語使用に敏感に反応するため、可變的で、その中心となる部分が蓋然的なのである (Bybee and Hopper 2001)。

(4) 文法化理論 (Grammaticalization)

Hopper and Traugott (1993) では、文法化の研究を次のように述べている。

文法化は二つの観点から研究されてきた。一つは歴史的な見方で、文法的な形式の源をさぐり、また文法的な形式におよぼす変化における典型的なみちすじ (pathways) を追究する。この観点からすると、文法化はふつう、ある文脈で使われていた語彙項目が文法的項目になる、あるいは文法的項目がより文法的になる、言語変化の部分集合 (subset) と考えられている。もう一つの観点はより共時的であり、文法化を主として統語論的、談話語用論の現象 (discourse pragmatic phenomenon) としてとらえ、言語使用を流動的パターンとして研究するべきである、とする。(日野訳 2003: 3)

通時的な観点に基づく研究は史的な変化を辿らなければならないが、歴史上の資料に問題があったり、不十分であったりする難点が付きまとう。通時的な言語変化は結局のところ共時態に投影される。われわれは共時態を研究することによって通時的な文法化を構築することも考えられる。

第二の観点としての文法化は、くりかえし現れてくるディスコースのパターンの結晶体としてとらえられる。創出される文法 (Emergent Grammar) へとつながっていくものである。

上述した言語の動態的研究の理論はそれぞれ独自の特徴を備えているが、言語使用の重視と、言語使用が文法に及ぼす影響を認めることで共通している。本研究は、これらの理論とその

実践的な研究からいろいろと得るところが多いが、これらの理論のどれか一つの枠組みの中で日本語の従属節のテンス体系の動態的研究を行なうわけではない。実際の言語的事実を考察することが最も重要なことであり、データを積み重ねてきた上で、帰納的に一般的なルールを発見することが先決であると考えられる。これはまた、そうすることによって、すでに構築された理論をより客観的に見ることもできると考えられる。

0.3 現代日本語のテンスに関する基本的な考え方

日本語のテンスに関する考え方は松下（1901）にさかのぼることができる。それに続いて、三矢（1908）や小林（1927）や三上（1953）などの研究があり、そして、それらの集大成として金田一（1955）の研究があった。

金田一（1955）を出発点に、現代日本語のテンスの理論的な研究が鈴木（1965）によって始まったということができよう。そして、その研究は、さらに高橋（1974）や鈴木（1979）や工藤（1995）などの研究によって大きく進められてきたと思われる。以下では、これらの研究に見られる現代日本語のテンスに関する基本的な考え方をごく簡単に述べておく。

テンスとは事態の時間的な位置付けを表わす形態論的なカテゴリーである。時間に関する形態論的なカテゴリーには、テンスのほかに、アスペクトもあるが、アスペクトとは運動の時間的な展開の捉え方の違いに関わる形態論的なカテゴリーである。現代日本語では単文や主節の動詞述語のテンスとアスペクトは表0-1に示されるように複雑に絡み合っている。

表0-1: 現代日本語におけるテンスとアスペクトの体系（鈴木 1996: 95）

テンス アスペクト	現在未来形	過去形
完成相	～スル	～シタ
継続相	～シテイル	～シテイタ

現代日本語のテンスという形態論的なカテゴリーは述語の終止形と連体形にある。そして、そのテンス形式は終止の述語に用いられる場合と非終止（連体）の述語に用いられる場合とで、意味・機能が異なる。前者の場合では、「スル」と「シタ」というテンス形式は文のテンポラリティの基本的な表現手段であり、基本的に発話時を基準とした絶対的なテンスを表わす。後者の場合では、テンスは特殊化しており、「スル」形式と「シタ」形式は、主節の事態の時間を基準とした相対的なテンスを表わすこともあれば、絶対的なテンスを表わすこともあり、また、テンスを表わすことをやめることもある。

また、現代日本語のテンスは、終止の述語に用いられる場合、ムードと複雑に絡み合っている。「スル」と「シタ」というテンス形式は、文の中で叙述法を表すが、「シヨウ」というさそいかけ法と「シロ」という命令法と対立する。このように、「スル」と「シタ」形式は、テンス的な意味とアスペクト的な意味とムード的な意味をそなえているわけである。

0.4 現代日本語とは

現代日本語とはいつの日本語をさすのか、改めて言う必要がないように思われる。しかし、研究者のうちに十分な合意があ

るわけではないし、本研究の題名に現代日本語と書いてある以上、簡単にふれておく必要がある。本研究でいう現代日本語とは下記の『日本語百科大事典』（金田一春彦・林大・柴田武編 1988）に示してあるように一般的に受け入れられる現代日本語の概念と同じく、明治期以降の日本語である。

一般に、明治期以降の日本語を「現代（日本）語」と呼ぶ。時には、昭和初年以降の日本語を「現代語」と呼ぶこともある。その場合は「近代語」で明治以降の日本語を指す。しかし、国語学界では「近代語」は室町期以降の日本語を指し、「現代語」は明治期以降の日本語を指すのが一般である。（『日本語百科大事典』・「明治・大正・昭和」・鈴木英夫・104）

現代日本語は明治時代の始まりから現在まで約 140 年ぐらいの歴史がある。言葉が生きていれば変化するというように、現代日本語とはいっても、明治・大正時代の日本語と現在の日本語とで異なる。本研究は現代日本語の時間節のテンス形式の使用における変化の側面を追究するのが目的の一つである。

また、現代日本語は江戸時代の日本語と分けられている。しかし、現代日本語のなかの明治・大正期の日本語は江戸時代（近世）の日本語と完全に断絶しているわけではない。江戸時代の日本語の存在しないところに現代日本語が生れようがないのである。したがって、本研究は必要に応じて、明治・大正期の日本語と密接に繋がっている江戸時代の日本語にさかのぼって考察することがある。

本研究では現代日本語と現在の日本語を区別する。明治期以降の日本語である現代日本語のうち、昭和以降、とくに戦後からいままでの日本語を現在の日本語としておく。